



## 1 康有為と青島

### (1) 第一次世界大戦

1917年康有為は60歳の華甲の歳を迎えた。元旦には60年の歳月を振り返って「開歳忽六十篇」と題する長編の詩を読んだ。還暦を迎え、上海で多くの門人たちの祝福を受けていた<sup>5)</sup>。

この年はまた中国外交にとって重要な年でもあった。すなわち、ヨーロッパで繰り広げられていた第一次世界大戦に際して、中国が参戦するかどうかが問われていたのである。同年2月には日本政府が中国に対して、ドイツと国交を断絶するように勧告をしている。またアメリカが中国に対して、一致して行動するように勧告している。『康有為先生年譜』(下)には、「アメリカ政府はドイツに対して断交した。中国に一致して行動するように勧める。総理の段芝泉(祺瑞)は賛成の立場を表明し、任公(梁啓超)もまた同じように主張した。ヨーロッパ戦団に参加すれば、我が国の国際的地位が高まる。大統領の黎元洪(元洪)は反対を表明した。先生(康有為)もまた中立を維持するために参戦に反対した」<sup>6)</sup>とある。この問題は康有為と梁啓超の対立を生んだのみならず、府(総統府、すなわち黎元洪を代表とする政治組織)と院(國務院、内閣総理段祺瑞を中心とする軍閥政治集団)との激しい対立を生み出した。

段祺瑞は日本の支持のもと積極的に参戦を主張し、日本からの借款を得て、自らの勢力の拡大をたくらんでいた。一方黎元洪は段の意図を察知して、国会を利用し、反対の決議を行った。さらに黎元洪は、段と日本との間に交わされたいわゆる「西原借款」が明るみに出た機会を逃がさず、段祺瑞の國務総理および陸軍総長の職務を罷免した。このような政治状況の下で、康有為の立場は鮮明であった。戦団に加入することは、博打で有り金をはたくことであり、自古から国を護り、人民を安らかにするためには、戦と言うことを口にしない。これは人道主義であると主張し、中国人のために戦団には加入すべきではないと言っている<sup>7)</sup>。

黎元洪は段祺瑞を罷免したあと、外交総長の伍廷芳を暫く総理に任命した。段祺瑞は烈火の如く怒り、電報を發し、総理を取り替える命令を下し、國務総理副署の同意を経ないのに、法律上の効力がなく、その上この事態によって影響がおきれば、責任を持つことが出来ないとし、段祺瑞は子飼いの督軍団に挑発させ黎元洪に反対した。また安徽省をはじめとする九省の督軍が続いて中央からの独立を宣言するなど、府院の争いは続いた。このような中で、孤立無援の黎元洪は陸廷榮の建議を受け入れて、安徽督軍張勳に時局を調停するようにと電報を打った。張勳はこの機に乗じて、国会を解散させ、各省の独立を取り消し、清朝最後の皇帝溥儀を前面に押し立てて、政治の表舞台に引き出した。これがいわゆる張勳復辟と言われるものである。

康有為は張勳の依頼を受けるかたちで、復辟に協力し、自ら弼徳院副院長<sup>8)</sup>の役職に就いた。清朝の遺臣を任じていた康有為にとっては当然のことであった。ただその後の政策方針をめぐって、張勳と対立し、復辟は失敗に終わった。康有為研究で著名な馬洪林教授は康有為晩年の誤りとして、この復辟事件を取り上げられている。「最大の歴史的な誤りは、民国六年の『丁巳復辟』に参加したことである」と言われ<sup>9)</sup>、康有為と張勳の政治への関わり方、目的

が異なっていると指摘された。その結果、張勳と袂を分かつこととなった。

## (2) 対華 21 ヶ条

さらには日本への諫言があげられよう。康有為にとって日本は初めて訪れた海外の地であり、いわば第二のふるさとと言っても過言ではないだろう。彼の変法のモデルとなったのは、言うまでもなく日本であった。その日本が中国に対していわゆる「対華 21 ヶ条」の要求を突きつけたのである。この要求は後の五四運動へとつながっていくものである。

1914 年 6 月に突発したボスニア・サラエボでのセルビアの青年によるオーストリア皇太子夫妻の暗殺事件は 2 国間の問題に留まらず、国際的な緊張を引き起こした。すなわち、オーストリアが 7 月にセルビアに対して宣戦を布告すると、ドイツがこれに呼応するかのようになりオーストリアに味方した。一方ドイツは、セルビアを支援していたロシアに対して宣戦を布告し、まもなくドイツとフランスが開戦した。さらにドイツがベルギーに侵入すると、イギリスもドイツに宣戦布告した。日本は日英同盟を締結していたために参戦した。ただ主戦場がヨーロッパであったために、日本は直接にはヨーロッパに軍隊を派遣せず中国山東省にあったドイツの権益をすっきり奪い取ってしまったのである。

1914 年 9 月日本軍は山東省龍口に上陸し、青島に向かって侵攻を開始した。言うまでもなく青島はドイツが 1898 年に中国侵略の基地としたところである。ドイツがヨーロッパ戦線で戦っているのに乗じて、日本がドイツの植民地青島および膠州湾一帯を手に入れたのである。

「対華 21 ヶ条」の要求<sup>10)</sup>を見てみよう。第一条には、「支那国政府は独逸国が山東省に関して条約に依り支那国に対して有する一切の権利・利益・譲与などの処分につき、日本国政府が独逸国政府と協定すべき一切の事項を承認すべきことを約す」。第二条「支那国政府は山東省内もしくはその沿海一帯の地又は島嶼を何らの名義を以てするに拘わらず他国に譲与または貸与せざるべきことを約す」。第三条「支那国政府は芝罘又は龍口と膠州湾より済南に至る鉄道とを連絡すべき鉄道の敷設を日本国に允許す」。第四条「支那国政府はなるべく速やかに外国人の居住および貿易のため、みづから進んで山東省における主要都市を開くべきことを約す。その地点は別に協定すべし」。以上の 4 項目が第一号山東権益と呼ばれるものである。つまり従前ドイツが山東省に持っていた権益をそっくりそのまま日本に認めよというものであった。

## (3) 五四運動

1919 年に起こった五四運動は、北京の学生たちによる救国愛国運動として位置づけられるが、いわゆる青島回収運動に他ならなかった。前述した要求を時の袁世凱政権が日本側と秘密裏に交渉を行って認めたものであった。そのことを国際的に認知したのが 1919 年 1 月にパリで行われた講和会議の席上であった。中国は戦勝国の身分で講和会議に臨んだが、イギリス、フラ

ンス及びアメリカなどの列強諸国は、青島を中国に返還するどころか、權益をそのまま認めてしまったのである。この決定に失望した北京の学生たちによって引き起こされたのが五四運動である。この運動に対して、康有為は学生たちに満腔の支持を寄せた。「曹汝霖、章宗祥たちはつとめて売国をおこない、自ら人民を刈ったのである。国の運命は久しく途絶えてしまった。国を挙げて怒りをなし、すべてのものは彼らを憎んでいる。……幸い今学生たちは義憤を發揚させて、天に代わって彼らを討ち、曹汝霖、章宗祥たちの罪科を正し……政府はすみやかに捕まえた学生を釈放し、そして売国賊を誅されんことを望む」<sup>11)</sup>。

さらに、康有為は日本の大隈重信や犬養毅に対して電報を送った。対華 21ヶ条發動の時の首相であった大隈に対しては、とくに抗議の意を表さず、中国の苦しみを述べ（「内乱頻仍，朝市遷移，生民塗炭，六年五乱，国勢顛危」）、中国では民主政治は国情に合わないことを言っている。また日本と中国がお互いに手を取り合って、東亜の安定を図りましょうと言うことを述べている<sup>12)</sup>。しかしながら、犬養毅に対しては、山東青島からの撤兵を要求している。「貴国はパリ講和会議は成功したと言っているが、列強諸国は疑いを持ち始め、激しくわが国の恨みを持った。貴国は、失うところも多くあったのです。わたしはただ坐して傍観しているだけであるが、悲しくて心を痛めています。内閣の原総理（原敬）、山本君（山本権兵衛）や床次君（床次竹二郎）などは私と旧知の間柄です。彼らは皆才能のある人ばかりだから、良策を持ち出して、このことを解決してくれるだろう。ただいままで何も解決の糸口さえ見つからなかったのはとても残念なことである。……ドイツとの旧条約はひとまず置き、兵を撤退し、鉄道を返し、袁世凱の二十一ヶ条、近頃の段祺瑞との軍事協定や徐世昌の順濟高徐などを破棄し、条件を求めないで、ことごとく我々に返還して下さい。そうすれば中国四億の人民は皆歎喜し、深く頭を垂れて大いなる徳を感じるでしょう。永く友好善隣を保てることだろう……」<sup>13)</sup>と。

康有為と犬養毅の関係は、1898年康が初めて日本に亡命した頃にさかのぼる。戊戌政変失敗後、康有為は北京から上海を経由して香港に逃げた。そこで宮崎滔天<sup>14)</sup>と深く知り合うようになった。宮崎は康有為を日本に逃亡させようといろいろな策を講じた。当時日本香港駐在の総領事上野季三郎は康有為のことで外務大臣大隈重信に電報を打った。その内容は康有為が矢野特命全權大使の宛てた電報と同一の物であった。電報の内容は、「皇帝が廢され、国が滅びようとしています。密書を奉じて貴国に救援を求めます。もし聞き入れて下さるならば電報で返事を下さり、保護を賜るよう望みます」<sup>15)</sup>。これに対して大隈は康有為を保護することができると答えた。そのうえ上野総領事は康有為に対して旅費 350 円を与えたという<sup>16)</sup>。また、宮崎は当時の様子をこう語っている。「帰って旅宿に至れば、一葉の來電あり、これ木翁の送る所の為替通知書なり、天祐なる哉、之れ無ければ余遂に康君との約を踏む能はざるなり」<sup>17)</sup>。木翁とはすなわち犬養毅のことであるから、犬養毅もまた康有為の來日に少なからず関わっていたのである。康有為は日本を去るときに、犬養に「木堂記」と言う書を贈った。その中には「支那に一士あり、康有為廣廈、講堂を粵（広東）に築き、これを号して萬木草堂という。……日本に元夫あり、犬養毅子遠という。高齋を江戸に築き、これを号して木堂とい

う。……康有為既に崩れ落ちた中国の一木支柱となり、改革を行いこれをあらためようと欲したが、堂構は繕い、風は吹き、木は折れ、堂構は傾き潰れてしまい、東海の浜に漂流した。東海の犬養毅は維新日本の柱となり、しかも立派な堂構を幾重にも築き、堂構は営みを助け、風が吹き、木が傾いてもなお東海上に屹立している。二本の木は東海において遭遇し、木を抱き合わせ、木を整え連ね合わせ相共に二儀（天と地）を俛仰し、大地を見て、東亜を指揮し、橋となり、梁となり、舟となり、筏となる。港海を塞ぎ、溝を掘りこれを通す。犬養毅は康有為に告げて言うには、あなたは支那の犬養毅である。ぼくは日本の康有為である……」<sup>18)</sup>。つまり彼らの往来は相互の信頼と友情に裏付けられたものであった。康有為は、薬をも掴む気持ちで犬養に支援を求めたのであろう。

この時期の康有為は、前述した政治的行動のほかに、著作活動や実業活動、それに教育活動に従事するなど、多岐にわたり精力的に活動していた。陳独秀が言ったように「忘れられた康有為」の姿はどこにもなかったのである。では何故このような評価が康有為に下されたのであろうか。やはり、辛亥革命以後の彼の活動、主として保皇会、孔教会、復辟とつながる一種の反動的な行動が辛亥革命以後の時代の流れ、すなわち共和制を標榜する政治体制の中で古色蒼然とした感が否めなかったからであらうか。

復辟失敗後、康有為は政権を奪取した段祺瑞に罪魁禍首とされ、北京のアメリカ大使館に半年余り逃げ込むこととなった。その後アメリカの保護の下に大使館を抜け出し、天津を経て青島、大連、済南へと向かった<sup>19)</sup>。康有為にとって初めての青島行きであった。当時の青島や大連には、清朝支配階級の一部が多く居住していた<sup>20)</sup>。やはり清朝の旧臣を意識した行動であっただろう。

康有為が初めて青島の地を踏んだのは、1917年11月のことであった。『南海康先生年譜続編』の記載によると、「冬遊青島、大連、旅順」<sup>21)</sup>とある。また青島で康有為自らが読んだ詩集に「丁巳冬至日遊青島並謁恭邸於會泉」がある。丁巳冬至の日は11月9日に当たる。この日青島を遊覧して、旧清朝の支配一族の恭親王宅を訪問したとすることであろう。

当時青島は日本が支配していたところであった。この年はまた日本人の手によって青島中学校が創設された年でもあった。この学校は青島在留の日本人子弟のための学校であり、日本の学制と教学方法を採用した中学校でもあった。在留日本人のための青島居留民団の設立は1923年3月まで待たなければならなかったが、その当時すでに多くの日本人が青島に居住していたことが分かる。

#### (4) 二度目の青島

1923年5月康有為は再び青島を訪れた。『南海康先生年譜続編』によると、「五月、過済南、登千佛山……旋赴青島、遊嶗山、並在青、済两地成立孔教會、以後改爲萬國道德會」<sup>22)</sup>とあり、済南から青島に来て、嶗山に遊んだ。この地は有名な道教の聖地である。

ここで孔教会について見ていこう。孔教会は文字通り孔子の教えを弘く宣教する目的を以て作られた組織であり、その淵源は康有為が 1895 年に在京の挙人を集めて清朝政府に提出した『上清帝第二書』（いわゆる「公車上書」）に見られる。「今速やかに道学の科目を立てた方が宜しいと思います。そこで儒者に講義をしてもらい、孔子の説かれた道を詳しく論述して……孔子の道を明らかにし、多く経費を集めて、各善堂をしてこれを援助し、村にある淫祠をして、ことごとく孔子廟に改めさせ、善堂、会館に孔子を祀り、これによって愚民を導くことを願い、聖なる教えを支え、異端を防ぐ……」<sup>23)</sup>と皇帝に上書したのである。康有為は伝統的な儒家の家に生まれ、幼いときから儒学を身につけた読書人、士大夫階級であった。彼が孔子の道を究め、孔子を尊ぶというのは当たり前のことであった。

しかしながら、康有為はこの当時は孔子だけを尊ぶようなことはなかった。香港や上海の繁栄を目の当たりにし、西学にも理があると言うことを理解し、肌で感じ取っていたのである<sup>24)</sup>。では何故に孔子の教えを全面に持ち出したのであろうか。康有為の生きた時代はまさに西洋列強諸国が中国を植民地とし、「瓜分体制」ができあがった時代でもあった。西洋列強諸国を支えている思想的背景としては、彼らにはキリスト教があった。中国にそれを求めようとするれば儒教のほかはない。中国を救う道として、中国伝統思想である儒教を持ち出したのではなかろうか。ただ初期の康有為の思想には、儒教主義者という面は余り見えない。前述したように、西学に関心をしめし、仏教に興味を持ち、自然科学方面にも造詣が深かった。

ただ辛亥革命以後の康有為は、ひたすら保皇会、孔教会、復辟といった時代の波に逆行する反動路線をひたすら走っていったのである。孔教会は 1912 年に設立されたが、孔教会設立当時の康有為はまさに「孔子」そのものであった<sup>25)</sup>。

1923 年 5 月康有為はこの地青島で家屋を購入した。家族に宛てた手紙の中で「青島は気候がとてもいいので、最近家を購入した。名目は賃貸であるが、実は買ったのである。庭は実に広いが、価格は安かった。数日後には入居できるだろう。今は旅館にいるが高いので、入居できれば、電報で知らせることにする。その時になれば是非青島に来て下さい。上海よりもいいところである。上海も恋しくなくなった」<sup>26)</sup>と、住み慣れた上海よりも青島の方がいいと言っている。

截海為塘山作堤            茂林峻嶺樹如莽  
莊巖旧日節樓在            今落吾家可隱栖<sup>27)</sup>

この康有為の詩は、何を物語っているのであろうか。海を鎮め、堤を作り、樹木が茫々と茂り、そこに莊巖とした節樓が立ち、いま我が家となった、と詠っている。手に入れた家屋はもとドイツの提督の家であった。この詩の題名を「甲子六月領得青島德国旧提督樓」という。また康有為は弟子の方子節に宛てた手紙の中で、「わたしは今家を買求めた。ドイツ人が青島を得た時の旧提督樓である。家は小さいけれども、庭は広く、海の眺めはすばらしく、海まで百歩足らずで行ける距離にあります。今ここを賃貸しているが、青島の官有地には賃貸という制度はなく、引き続いて借りることが出来る。公園を管理するものは、わたしのために、木

や花を配置してくれる。そこには自由に入ることが出来る」<sup>28)</sup> といっている。ここは海の景色と山の荘厳さの両方を楽しめると言うことで、かなり気に入っていたことが分かる。上海はもう恋しくないと言っているぐらいであるから。現在の青島福山路にある康有為故居に当たる。信号山の中腹に位置し、海を望める絶好の位置にある。さすがに今は建物が多く建ち往時のように海を望むことは出来ない。

## (5) 大学の創設

青島で康有為は何をしていたのだろうか。1923年6月家族に宛てた手紙の中で、「青島の家はとてもすばらしいものである。今までこのようなところは見たこともなかった。ここに大学を創設しようと考えている。青島に大学を創設しようと思えば、ここにある萬年兵舎を大学に充てようと考えている。購入して創設しようと思っている。だから永く青島に住むことにする。上海の家はもう不用である。すでにある人が家を欲しいと聞いてきたので、わたしは十萬だと言った。そしてこれを売って、負債を完了させた」<sup>29)</sup> といっている。康有為は青島で大学を創設することを考えていた。このことを示す史料は康有為が弟子の潘馨航に宛てた手紙にも見られる。すなわち「曲阜大学を創設しようとまじめに考えていたので、しばしば依頼を受け、寄付金も出し、教員の厚意をすぎり、曲阜に行き、とくに大学の校地を吟味して調べると、一つのいい場所を得た。魯城に囲まれ、沂水が周りをめぐっている。風景はすばらしい。こんないいところはない。暑さを避け、青島で大学の規則などを作った。曲阜大学の規模は非常に大きいものになりそうなので、何年もかかりそうなので、まず青島に予科を開くことにした」<sup>30)</sup> とあり、大学予科創設のための負債も完済したと言っているのだから、青島に予科が開かれたのであろう。彼の青島の家には「天遊堂」の扁額が架けられていたといっているので、予科に相当するのかも知れない。

## (6) 康有為の死

1927年2月、康有為は上海で七十歳古希を迎えた。『年譜長編』には「先君、七十歳の誕生日にあたり、門弟および娘の同薇、同璧たち、皆上海に来て、長寿を祝った。梁啓超は『七十壽』の序を撰じ、情操豊かなで且つ優れた文章を書き、傳をしばらく諳んじた。また漢の優れた成語を集め撰じて対聯を作る。『先聖の玄意を述べ、百家の整わざるを整え、ここに歳七十を迎える。高德の老人の前で食事をし、酒を酌み交わそう。受業生はおそらく三千人ぐらいであろうか』。時に南北の戦争の真っ最中であつたので、誕生祝賀会が済んだあと、すぐに青島に行った。先君、誕生日には身体の不適を覚え、二月二十八日午前五時三十分、青島福山路の家で亡くなった。すなわち陽暦の三月三十一日に当たる。遺骸は青島李村象耳山下に葬られた。先君は上海を離れるときに、自ら遺稿をを点検し、礼服を携え、青島に向かった。庭園をほとんどくまなく歩き回り、そうして言うには、わたしと上海の縁は切れてしまったと。写真

を用人にやり記念とさせた。あらかじめ永遠の別れを分かっていたかのように」<sup>31)</sup>とある。もう少し詳しく見てみよう。康有為の家族の話によると、「康有為の致命的な死因は二月二十六日に同郷の人が設けた宴会に参加した折りに、一杯のオレンジジュースを飲んだ。それで腹痛を起こした。二人の医者に診断してもらったが、そのうちの日本人医者が食物中毒であると診断した。だいたい二十時間我慢をしていたが、忽ち至る所から出血して死んでしまった」<sup>32)</sup>。

康有為が葬られたのは、『年譜続編』にもあるように、もともと李村象耳山にあったが、1985年に浮山の南面、山を背にし、海が望める大麦島村北山に遷された。今の中国海洋大学浮山校区の背後に当たる。康有為の弟子にあたる劉海粟<sup>33)</sup>の手によって『南海康公墓誌銘』が新たに作られた。「公有為と諱す、もとの名は祖詒、字は広廈、長素と号した。戊戌後号を更生と改めた。広東南海の人。公十九歳の時、郷試に落ちた。そこで天下のことを考えるようになった。光緒十四年皇帝に上書するが果たせず、十七年新学偽経考を著す。二十年都に入り会試にのぞむ。弾劾に会い書を焼かれたが、彼の名は益々有名になった。次の年、中日馬関条約では天下が非常に騒がしくなったが、公深くこれを恥じ、弟子の梁啓超とともに、各省の拳人を集め、和議を拒否するように上書した。世に公車上書といわれるものである。会試では榜発となり、進士となった。工部主事を授けられたが、辞して就かず、広東に返り萬木草堂で学を講じた。孔子改制考を著した。二十三年公再度都に上り、二十四年の年首に李鴻章や翁同龢などにまねかねて総理衙門で会談した。公は縦横に変法の宜しきを論じたが、多くの人は難しいと思った。翁同龢は公の言葉を入奏した。徳宗は勅を下し、宮廷で会談された。変法の勅は下され、君主立憲を唱えたのであった。西太后那拉氏に逆らい、また袁世凱のために売られるところとなり、譚嗣同等六君子が処刑されたのだ。公海外に亡命すること十六年、地球を三周し、三十一カ国を遊歴し、六十萬里の行程であった。大同書諸作を撰じた。辛亥後、母の喪に服するために帰国し、上海に天遊書院を創設し、自ら天遊化人と号した。公は博学にして文を善くし、詩文に優れ、鑑賞に通じていた。力めて革新を主とした。しかしながら軍閥が横行し、志を叶えることは出来なかった。憂いながら青島で一生を終えた。公は清咸豊戊午の年に生まれ、民国丁卯の年に亡くなった。享年七十歳。公の墓は丙午の年に破壊されたが、いま青島市人民政府の修理するところにより、山を背にし、海を望み、厳肅なところに新しい墓を得た。銘に言う、公は南海に生まれ、黄海に帰した。わたしは上海から公に従ったが、わたしは青海原より公に銘するものである。文章の偉業はとこしえに光り輝くであろう」<sup>34)</sup>。

現在康有為の墓は青島海洋大学浮山校区の山の手ひっそりとあるが、筆者が昨年秋に訪れたときは一面茫々とした雑草ばかりで、人が訪れた様子は全くなく、ただ荒れるに任せてあった。



## 〈注釈〉

1) 『新青年』第2巻第2号 民国5年10月1日。「南海康有為先生爲吾國近代先覺之士。天下所同認。吾輩少時讀八股講舊學。每疾視士大夫習歐文談新學者。以爲皆洋奴。名教所不容也。後讀康先生及其徒梁任公之文章始恍然於域外之政教學術燦然可觀。茅塞頓開。覺昨非而今是。吾輩今日得稍有世界知識其源泉乃康梁二先生之賜。是二先生維新覺世之功。吾國近代文明史所應大書特書者矣。厥後任公先生且學且教。貢獻於國人者不少。而康先生則無聞焉……」。南海康有為先生は我が国近代の先学の士であることは天下の認めるところである。私は幼い頃より、八股文を読み、旧学を学んできた。士大夫たちは欧文を習い、新学を語るのは、皆洋奴とみなした。その後、康先生及び弟子の梁任公（啓超）の文章を読んだ。政教学術方面が燦然と輝いているように見えた。私が今日得た世界知識の源泉は、すなわち康梁二先生の賜であると述べ、続けて本文にあるように、康南海先生の名前は聞かないというのである。

2) 竹内弘行『後期康有為論—亡命・辛亥・復辟・五四』同胞舎 1987年（京都大学人文科学研究所共同研究報告『五四運動の研究』第4函14）のなかで、「結論から言えば、戊戌变法までの時期か、『大同書』の思想研究に限られて、それ以外はほとんどないのが現状である」（94頁）といわれている。もっとも該書が上梓は1987年のことであり、最近の研究史にはふれない。ただ管見する限りでも、戊戌以後の康有為研究については極めて少ないのが現状である。

3) 坂出祥伸『中国近代の思想と科学』（改訂増補版 朋友書店 2001年）には、辛亥革命前後の康有為の行動にふれた論文が収められている。一つはシンガポールにおける康有為の行動を記したもので、康有為暗殺にかかわるものである（「康有為暗殺事件をめぐる—中西重太郎の書簡の解説—」）。他の一編は康有為が神戸須磨に住んでいた時代のものである（「康有為の須磨客寓時代」）。

4) 村田雄二郎先生は早くから尊孔問題に取り組み、1993年に広東省南海県で行われた「戊戌後康有為梁啓超與維新派國際學術研討会」において、「辛亥革命時期の尊孔問題」を発表された。さらに関係論文としては「孔教と淫祠」（『中国—社会と文化』第7号 東大中国学会 1992年）や「王朝・国家・社会」（『アジアから考える』5 東京大学出版会 1994年）、「康有為と孔子紀年」（王晓主編『戊戌維新と近代中国の改革—戊戌維新百周年國際學術討論会會議文集—』社会科学文献出版社 2000年）などがある。

5) 「南海康先生年譜続編」（『康南海自編年譜』[康有為學術著作選] 中華書局 1992年）183頁。「二月五日、六十初度、門人集滬祝釐」。

6) 吳天任撰『康有為先生年譜』（下）藝文印書館 1994年 633頁。「美政府対德絶交、勸中国採一致歩急驟、総理段芝泉（祺瑞）立表賛成、任公亦同此主張、欲進一步加入協約戰団、提高我国在國際地位、総統黎宋卿（元洪）則表反对、先生亦主維持中立、反对參戰……」。

7) 吳天任撰『康有為先生年譜』（下）、633～634頁。

8) 弼徳院は、清の宣統3年4月におかれた官庁名。『清史稿』職官志六「弼徳院、院長副院長各一人、顧問大臣三十有二人、掌參預密勿朝夕論思、並審議洪疑大政云々、宣統三年設」。

9) 馬洪林『康有為評伝』南京大学出版社 1998年 23頁。

10) 対華21ヶ条については、丸山松幸『五四運動』紀伊國屋書店 1981年の52頁以下を参照した。

11) 康有為「請誅国賊救学生電」（湯志鈞編『康有為政論集』下 中華書局 1981年）1066頁。「曹汝霖、章宗祥等力行買國、以自刈其人民、断絶其國命久矣。挙国憤怒、咸欲食其肉而寝其皮。……幸兮学生発揚義憤、奉行天誅、以正曹汝霖、章宗祥之罪。挙国迅聞、莫不歡呼快心、……政府宜亟釈放被捕学生而誅売国賊」。

12) 康有為「復大隈侯爵書」(湯志鈞編『康有為政論集』下) 1005 頁。

13) 康有為「電犬養木堂轉達撤兵交還文」(湯志鈞編『康有為政論集』下) 1068 頁。「貴国於巴黎大会雖得成功，然見疑於列強，激忿於敝国，所失多矣。鄙人坐視傍觀，戚戚傷懷，不能少有所補助，竊為痛心者久之。内閣之原總理山本君，吾旧交也，床次君，吾聞声相知也，皆高才達識，必有良策以解之，憾至今尚未見之也。……凡德国旧約一概置之，撤駐兵，還鐵路，乃至袁世凱之二十一条，及近者段祺瑞之軍事協定，與及徐世昌之順濟高徐之路約，皆折約券，焚盟書，不索条件，尽還於我，則四萬萬人歡喜踊躍，莫不稽首咸戴大德，永紉善隣……」。

14) 宮崎滔天 (1870 ~ 1922) は、中国革命運動の援助者。名は寅藏。熊本県の生れ。徳富蘇峰の大江義塾に学ぶ。犬養毅の知遇を得て中国革命運動事情を調査。1897 年来日中の孫文を知り、1905 年黄興と孫文を引合せて中国同盟会結成に尽力。辛亥革命後中国で革命派を支援。また康有為の日本亡命に協力する。

15) 「康有為求救方電請ノ件 香港在勤上野領事ヨリ大隈外務大臣宛 (電報)」(外務省編『日本外交文書』第 31 卷第 1 冊 日本国際連合協会 1954 年) 666 頁。「Okuma, Tokio, From 康有為 to 矢野特命全權公使：上廢國危奉密詔求救敬詣貴國若見容望電覆並賜保護。He confidentially requested me to transmit the above. Uyeno」

16) 手代木公助「戊戌より庚子に至る革命派と変法派の交渉」(『近代中国研究』第 7 輯 1966 年) 177 頁。

17) 宮崎滔天「三十三年の夢」(『宮崎滔天全集』第 1 卷 平凡社 1971 年) 133 頁。

18) 康有為「木堂記」(光緒 25 (1899) 年 3 月) 蔣貴麟編『萬木草堂遺稿外編続集』台北 成文出版社 1983 年 36 頁。「支那有一士，康有為廣廈，築講堂於粵，號之曰萬木草堂。……日本有元夫犬養毅子遠，築高齋於江戸，號之曰木堂。……康有為既以一木支柱廢毀之支那，欲改革而新之，堂構甫繕，颯起木折，堂構傾毀，漂流於東海之濱。東海犬養毅以一木柱維新之日本，而層重翼麗之堂構，堂構甫營，颯起木欹，猶屹立東海上。兩木遇於東海，為合抱木，為連理木，相與俛仰二儀，顧盼大地，指揮東海，為橋為梁，為舟為方，填塞渤海而溝通之。犬養毅告康有為曰：子支那之犬養毅也，僕日本之康有為也……」。

19) 吳天任撰『康有為先生年譜』(下) 665 頁。

20) 「6 清国皇族渡来風説二関スル件」(旧清皇室関係雜件)(作成者：中山關東庁警務局長／内田大臣／橋本正治，中山關東庁警務局長，内田大臣，橋本正治)(外務省外交史料館所に、恭親王に關連して次のような記事がある。「未ダ曾テ民国ヨリ援助ヲ受ケタルコトナク，又之ヲ峻拒シ居リ。目下青島ニハ夫人及二男二女ノ家族アリ，旅順ニ適當ノ家アラバ一家ヲ引纏メ転住スヘク……」。当時，青島や旅順には多くの旧清朝の皇室関係者が住んでいたようである。

21) 「南海康先生年譜続編」(『康南海自編年譜』) 193 頁。「冬遊青島，大連，旅順」。

22) 「南海康先生年譜続編」(『康南海自編年譜』) 219 頁。

23) 康有為「上清帝第二書」(湯志鈞編『康有為政論集』上) 132 頁。「今宜亟立道学一科，其有講学大儒，發明孔子之道者，……講明孔子之道，厚籌經費，且令各善堂助之。並令鄉落淫祠，悉改為孔子廟，其各善堂會館俱令独祀孔子，庶以化導愚民，扶聖教而塞異端」。

24) 康有為は 25 歳の時に，上海に初めて出て，ここで上海の繁盛を治めるのに，西洋人には統治能力があるということを知り，西学の必要性を感じ取っていた。「道經上海之繁盛，益知西人治術之有本」(『康南海自編年譜』11 頁)。

25) 康有為「孔教会序」(一)(湯志鈞編『康有為政論集』下) 734 頁の「説明」には、「陳煥章附志」を引用して、「まさに孔教会發足時に，南海康先生を孔教の巨人とした」とある。陳煥章は孔教会の發起人の一人。

(26) 李雲光『康有為家書考釋』匯文閣書店 1979年 44頁。「青島氣候佳甚。頃得一官產屋，名為租，實則同買。園極大，價極少。候數日可得。今各人住客棧極費，候得屋，當電告，至時可來青島，實遠勝滬矣。滬無可戀」。

27) 康有為『萬木草堂詩集』上海人民出版社 1996年 425頁。

28) 李雲光『康有為家書考釋』匯文閣書店 1979年 44頁。考釈参照。

29) 李雲光『康有為家書考釋』47頁。「青島此屋之佳，吾生所未有。加以有大學辦，吾欲在青島辦之，以有現世大學舍也。吾俟收款即辦。則當長住青島。滬屋無用，已有人問，吾索十萬。甚欲售之了債」。

30) 康有為「與潘馨航」（蔣貴麟編『萬木草堂遺稿外編』下）677頁。「執事拳拳以曲阜大學為念。屢承付託，慨然捐助。仰見尊教作人之盛意。到曲阜，曾特勘大學地祉，得一佳地。環魯城而繞沂水，形勢風景，莫不絕佳。避暑青島，曾擬大學章程。並以曲阜大學工程宏大，成須累年，故欲就青島先開預科」。ただ青島に大学を開くという康有為の構想は、当時の青島の指導社会層の中にあつた考え方でもあつた。とくに膠澳商阜督辦であつた高恩洪は、青島大学の創立に関して非常に熱心であつた。かれは北洋政府の教育総長を務めた人物であつた。その後紆余曲折を経ながらも、1924年8月には私立青島大学が設立されるのである。康有為の計画した大学は創立を見なかつたが、かれが当地に与えた影響は甚だ大きかつた。鄭貝満・周荃「晩年康有為與青島」『青島文博論叢』青島出版社 1991年 211頁参照。

31) 「南海康先生年譜統編」（『康南海自編年譜』）235頁。「二月五日，為先君七十壽辰，門弟子及女同薇，同璧咸到上海祝嘏。梁啓超撰七十壽序，情文並茂，傳誦一時，又集漢賢成語撰一聯云：述先聖之玄意，整百家之不齊，入此歲來，年七十矣！奉觴豆於國叟，致歡忻於春酒，親受業者，蓋三千焉！時因南北戰時方酣，過壽日後，即去青島。當先君壽日，體已覺不適，至二月二十八日午前五時三十分，逝世於青島福山路寄廬，即陽曆三月三十一日，遺體葬於青島李村象耳山下。先君去滬時，親自檢點遺稿，並將禮服攜帶。臨行，巡視園中殆遍，且曰：我與上海緣盡矣！以其像片分贈工友，以作記念，若預知永別者焉」。

32) 李雲光『康有為家書考釋』76頁。康有為はオレンジジュースを飲んで中毒を起こし死んだということであるが、まさか康有為一人だけがオレンジジュースを飲んだわけではあるまい。彼の死因については謎めいたところがあるということにしておこう。英記酒樓は現在の春和樓（中山路天津路交差のところ）であろう。筆者の調査によれば、春和樓は百年以上の歴史を誇るどころであり、康有為と関係があるという。

33) 劉海粟（1896～1994）は中国上海で最初の美術学校をわずか17歳で設立した美術教育界の第一人者。1917年上海美術專科學校で男子裸体モデルを採用し、1920年には女子裸体モデルを採用して、西洋式美術教育のスタイルを完成させた。中国建国後は、上海美專の後身である華東芸術專科學校、南京芸術學院の校長、院長、名譽院長を歴任し、中国美術教育界のトップとして活躍した。康有為に書を学んだ。

34) 劉海粟の手による新しく立て直された康有為の墓誌銘は、「公諱有為，原名祖詒，字廣廈，號長素，戊戌後易號庚生，広東南海人也。公十九歳時，郷試不售，即慨然以天下為己任。光緒十四年，伏闕上書，不得達。十七年，撰新學偽經考。二十年入京會試，遭彈劾，書被焚，而名益彰。次年，中日馬關訂約，天下警警，公深耻之，與弟子梁啓超会各省舉人，上書拒和議，世称公車上書。值會試榜發，成進士，授工部主事，辞不就。返粵講學於萬木草堂，撰孔子改制考。二十三年，公復赴京。明年歳首，李鴻章，翁同龢等，廷晤於總理衙門。公縱論變法維新之宜，衆莫能難。翁以公言入奏，德宗下詔陛見，變法詔下，倡君主立憲。忤西太后那拉氏，又為袁世凱所賣，譚嗣同等六君子死焉。公亡命海外十有六年，三周環瀛，經三十二國，行六十萬里，撰大同書諸作。辛亥後，丁母忧帰国，在滬創天遊書院，自號天遊化人。公博學善文，擅詩書，

精鑑賞，力主革新。然軍閥橫行，志不得酬，郁郁終於青島。公生於清咸豐戊午，卒於民國丁卯，享年七十。公墓毀於丙午，今得青島市人民政府重修，背山臨海，肅穆壯觀。銘曰：公生南海，歸之黃海，吾從公兮上海，吾銘公兮滄海，文章功業，彪炳千載」。